

第二節 煉炭原料等運炭ノ狀況

一〇〇

二八

(終)

第二編 煉炭事業

第一章 煉炭ノ研究調査時代

明治十七年二月筑前國遠賀郡戸畠村煉炭製造社長蔭山是世ハ福岡縣令ヲ經由其ノ製造煉炭ヲ海軍ニ買上ゲラレンコトヲ出願セリ

(註)右願書及之ニ對スル岸良福岡縣令ノ副申ヲ綜合スルニ本社ハ明治十二年ノ創業ニ係リ佛國ヨリ機械一式ヲ購入シ且ツ佛國人ヲ雇役シ洋法ヲ以テ煉炭ヲ製造シ來リシガ何分ニモ本邦創始ノ事業ニシテ製品ノ需要モ確立セズ且ツ其混和物ハ英國品ヲ使用セルタメ原價不廉經營困難ヲ極メタリシガ今回内國ニ於テ右混和物(乾テール代用品)ヲ發見セルタメ舶來品ヨリモ良好ニシテ代價モ廉價トナリ煉炭一噸ニ付社元積渡金四圓横濱ニテ船ヨリ船へ直渡金七圓五十錢トナレリト云フ

川村海軍卿ハ長谷川調度局長ノ提案ヲ決裁シ同年五月本煉炭ノ調査方ヲ當時ノ天草無煙炭質調査委員ニ命ゼリ右調度局長提案ハ當時ノ狀況ヲ知ルニ便ナルヲ以テ左ニ之ヲ掲グ

福岡縣煉炭
製造社ヨリ
買上願
(明治十七年)

仰 裁 (明治一七、五、二三決裁)

一〇一

別紙福岡縣申出同縣下煉炭製造社出願煉炭試驗云々ノ儀ヲ案ズルニ右煉炭ハ石炭ニ含有スル土石及鐵器ニ防害アル硫黃ヲ除去シテ製造スルガタメ其ノ效益著シトノ趣ニ有之而ルニ即今該出願者出京中ニ付其陳述スル所ヲ聞クニ第一硫黃ヲ去ルガタメ汽罐ニ害ナク且ツ變質ノ恐ナシ

第二其ノ製造タル煉瓦石ノ形ニ類スルヲ以テ通常ノ石炭ニ比スレバ多額ヲ積ミ得ルノ便アリト云フ果シテ其ノ言ノ如クンバ裨益少カラザル次第ニ付キ今般御取設相成候天草無煙炭質調査委員ニ被命詳細御取調相成候様致度左ニ御達案ヲ草シ御高裁候也(別紙省略)

明治十九年二月雇外人佛國海軍造船大監エミル、ベルタン氏(Emile Berlin)ハ汽罐ニ煽風器ノ使用、焚火夫ノ養成、石炭ノ研究等ニ關スル意見ヲ提出シ就中石炭試驗罐ノ必要及煉炭ノ使用ニ言及セリ

海軍ハ豫テ軍用炭ノ調査ニ努メツツアリシ折柄當時ノ石炭調査委員(中佐田中綱常機關中監士屋平四郎、二等技師赤峰伍作等)ヲシテ右ベルタン氏意見ヲ調査セシメ同委員ハ同年六月石炭試驗罐ノ必要ヲ上答シ横須賀造船所ニ於テ之ヲ製造セシメラル事トナリ。又煉炭ニ付テハ本

ベルタン氏
意見
(明治十九年)

石炭試驗罐
ノ製造ヲ決
(明治十九年)

和炭ヲ佛國
ニ送リ煉炭
試製
(明治十九年)

邦炭中炭脈充分ナル左記數種ノ石炭ヲ選ビベルタン氏ヲ介シ佛國アンサン塊炭社ニ送リ製造試験ヲナサシムルコトトナレリ

天草炭

幌内炭

新原炭

漆生炭

翌年アンサン社ハ右日本炭試験ノ結果天草炭ハ煉結ノ前ニ洗炭スルヲ可トシ新原炭及幌内炭ハ汽罐ノ良燃料タルヲ得ベク漆生炭ハ煉炭トシテ結果良好ナラザル旨ヲ報告セリ

又別ニ佛國煉炭ヲ購入貯藏スルコトトナリシガ(明治二十年度横須賀へ配炭額中佛國煉炭二、四九八、二〇〇斤アリ)石炭調査委員ハ明治二十年十一月横須賀造船所ニ於テ製造中ノ軍艦高雄用汽罐ニテ右佛國煉炭ノ試焚ヲナシ本煉炭ハ英炭ニ比シ著シキ優劣ナク炭塊方正ナルタメ炭積ヲ減シ火夫ノ勞ヲ省キ加之點火ヲ容易ナラシムルニ於テハ優等ニ可有之旨ヲ報告セリ一方豫テアンサン社ニ試製セシメタル和炭ヲ原料トスル煉炭及朝鮮產石炭等ニ付試験ヲ重ネタル結果二十二年三月海軍省艦政局ハ其成績ヲ総合シ

一、朝鮮及漆生石炭ハ自然通風ニテハ點火困難、汽釀遲ク通常艦船ニハ不適當、送風機ノ艦船ニハ充分使用セラルベシ

一、天草煉炭ハ自燃通風ニテハ容易ニ燃燒セズ送風機ヲ要ス

各種石炭、
煉炭試験及
意見
(明治二十二年)

佛國煉炭大
量輸入
(明治二十年)
右煉炭ノ試
驗

一、幌内炭ハ新原炭ニ比シ多少優レザル所アルモノノ如シ。

一、新原煉炭ハ自燃通風ニテモ送風法ニテモ充分燃燒頗ル便利ノ良炭ト言フベシ。

然レドモ各種炭共煉炭ニ製造スルニハ多額ノ費用ヲ要スルヲ以テ塊炭ハ採掘ノ儘使用シ粉炭ハ其時ノ便宜ニ依リ煉炭ニ製造スルヲ可トスル旨ヲ報告シ且以上試験ノ成績ニ依レバ新原炭ノ外ニ良炭ヲ見ズ速ニ採炭ニ着手セシコトヲ望ム旨ヲ附言セリ。

斯テ別ニ記スルガ如ク新原採炭所ハ明治二十三年三月設立翌二十四年ニテ出炭ヲ見ルニ至レル處海軍當局ハ其後モ引續キ石炭調査委員ヲシテ諸般ノ調査ニ從事セシメタリ。

一方大機關士武田秀雄ハ明治二十三年來松島回航委員トシテ佛國出張中ノ處同二十五年更メテ同國留學ヲ命ゼラレンガ同國煉炭事業ニ關シテモ調査報告スル處アリ之等内外ニ於ケル研究調査ノ結果愈々海軍用煉炭製造ノ重要性ヲ認メラルニ至レリ而シテ此頃民間ニモ別ニ述ブルガ如ク煉炭事業ヲ企テ海軍ニ其試験ヲ願出ヅルモノ少カラザリシガ何レモ成功ノ見込ナクシテ止ミタリ。

明治二十六年五月常備艦隊司令長官ハ煉炭製造ノ必要ニ關スル松島機關長佐久間機關少監ノ意見ヲ進達スル處アリシガ之ニ對シ伊藤海軍次官ハ煉炭ノ製造ハ希望スル處ニシテ既ニ其製造法

ニ付調査ノ次第モアレド之ヲ官業トシテハ到底行ハレ難キ儀ナル旨ヲ同長官ニ申進メタリ而シテ一方明治二十七年二月川口海軍省經理局長（當時經理局ハ燃料事項ヲ主掌セリ）（石炭調査委員ニ對シ「現時指定ノ海軍用炭ハ果シテ艦艇ノ實勢ヲ顯表シ得ベキカ若シ實勢ヲ顯表スルコト難シトスルトキハ其之ヲ顯表シ得ル方法如何」）ヲ諮詢セシメ又在佛武田大機關士ニ對シテハ更ニ煉炭製造ニ關スル綿密ノ調査ヲ電命セリ是ニ於テ石炭調査委員ハ當時ノ指定炭タル新原上等炭、同中等炭、同下層炭、漆生炭、幌内炭、高島炭等ニ付實驗ノ結果之ヲ英炭、佛國煉炭ニ比較シテ何レモ艦艇ノ實勢ヲ顯表シ得ザルモノト斷ジ更ニ參考ノ爲指定外ナル天草瓦炭、天草光炭及紀州炭ニ就キ試験シ就中天草瓦炭及紀州炭ハ採掘ノ儘單獨ニテハ缺點アルモノ人工ヲ加ヘ改良ノ望ミナキニアラズトセリ。

又委員ハ以上諸炭ノ混合炭ニ就テモ實驗ヲ試ミシガ結局適當ナル配合ヲ以テ煉炭ヲ製造セバ恐ラク佛國煉炭ニ劣ラザル炭料ヲ得テ完全ニ艦艇ノ實勢ヲ顯表シ得ル見込ニ付此際更ニ委員ヲ設置シ煉炭製造ニ關スル調査研究ヲ命ゼラルノ急務ナルコトヲ上答セリ。

武田大機關士ハ其後間モナク明治二十七年六月歸朝後報告ヲ提出セシガ佛國ニ於ケル調査ニ基キ
① 煉炭製造ノ起源 ② 煉炭ノ利益 ③ 煉炭製造原料 ④ 煉炭製造ノ方法 ⑤ 佛國アンサン

及ベツセージ煉炭製造所 ①我國ニ於テ良好ノ煉炭ヲ製造シ得ルヤ ②煉炭製造機械設備及費用 ③機械註文ノ方法 ④煉炭製造費等ノ諸項ヲ詳説シ我國ニ於テモ天草炭又ハ漆生炭ニ少量ノ漆煙炭ヲ加ヘ其ノ製法ニ注意スレバ良質ノ煉炭ヲ得ベキコト殆ンド疑フ容レズトナシ左ノ如ク所見ヲ附加セリ

「我海軍ノ既往ヲ顧ルニ今日ニ至ルマデ燃料選定ノタメ當局者ノ心ヲ苦メタルコト決シテ尠カラズ或ハ石炭調査委員ノ編成セラルアリ或ハ新原炭試驗委員ノ下命セラルアリ又ハ石炭自燃ノコトヲ研究スルアリ我海軍當局者ガ好良ノ石炭ヲ我國土ニ求ムル事ニ汲々シ敢テ怠ル處ナカリシハ人ノ普ク明知スル處ナリ

然レドモ如何セノ國土四百余ヶ所ノ炭坑ヲ有スルモ產出スル炭類ハ一ツモ我海軍ノ望ヲ満スニ足ラズ而シテ時將ニ海軍擴張ノ機運ニ際シ兵船ノ數ハ兩三年ヲ出デズシテ頓ニ増加セントシ汽機ノ改良進歩、最高壓蒸氣ノ使用ハ愈々盛ナラントシ之ガ爲石炭問題ノ確定ヲ促ス且日ヨリ急ナラントス若シ今ニシテ之ニ應ズルノ策ヲ講ゼズンバ他日ノ禍害知ルベキノミ

且ツ夫レ今回ノ事件ハ貴重ナル實驗ヲ我海軍ニ與ヘタルモノニシテ石炭改良ノ急最モ切ナリトス而シテ改良ノ道今日ニ在テハ只煉炭製造所ヲ起スノ外他ニ良策アルヲ見ザルナリ」

(明治二十七年) 湯地聯合艦隊機關長上申

明治二十七八年戰役起ルヤ開戰後間モナク英炭ノ購入意ノ如クナラズ出征艦艇ニ在リテモ多クノ場合和炭ヲ供用スルノ止ムヲ得ザル狀況ニアリ益々軍用煉炭製造ノ緊要ヲ認メラレタリ明治二十七年八月開戰第二月伊東聯合艦隊司令長官進達ニ係ル同隊機關長機關大監湯地定監ノ意見亦此間ノ事情ヲ具シ煉炭ノ必要ヲ力説セリ其要旨ヲ摘錄スルコト次ノ如シ

現今各艦ニ使用スル石炭ノ儀ニ付意見上申

我海軍諸艦艇ニ使用シ充分ノ勢力ヲ顯表セシムルニ足ルベキ良炭ヲ選定スル事ニ付テハ其ノ筋ニ於テモ多年苦慮セラル處ニシテ夙ニ石炭調査委員ヲ編成セラレ精査一日モ怠ルコトナカリシト雖モ未ダ目的トスル燃料ヲ我國土產出ノ炭類中ニ得ル能ハズ是ヲ以テ今日ニ至ルマデ水雷艇ニハ英炭ヲ供給シ其ノ他ノ艦船ニ在テハ種々ノ缺點アルニ不係勉メテ我國ノ石炭ヲ使用シ來レリ然ルニ我國ノ石炭ハ到底我海軍ノ各艦殊ニ新艦艇ノ用ニ適セザルモノニシテ一朝有事ノ日ニ際シテハ之ガ爲艦船ノ勢力ヲ減殺スルコト實ニ少々ニアラズ而シテ斯ノ如キ場合ニ臨ミ英炭ヲ以テ其急要ニ應ゼシメント欲スルモ供給素ヨリ限アリ平時ニ於テ我海軍ノ需用ニ充タスベキ量ヲ東洋市場ニ求ムル既ニ已ニ困難ナリ況シヤ其需要平時ニ數倍スル戰時ニ

於テ一大困難ヲ感ズル誠ニ其處ナリ聞ク今回ノ事件發起セシ以來當局者ガ最敏捷事ヲ處シタルニ拘ラズ英炭ハ疾ニ其缺乏ヲ告ゲタリト知ルベシ其困難ノ大ナルヲニシテ……（中略、編者曰ク茲ニ和炭ノ軍用ニ適セザル狀況ヲ説明シアリ）……

今回我艦船艇ニ搭載セシ石炭ハ小量ノ英炭ヲ除クノ外ハ專ラ唐津、赤池、田川、新原等ノ產ニシテ……（中略、編者曰ク茲ニ和炭ノ軍用ニ適セザル狀況ヲ説明シアリ）……

而シテ這般我艦船ノ多クハ僅ニ其機關全力ノ半又ハ其幾分ヲ發成セシメタルニ過ギズシテ終ニ全力汽走ノ機會ニ遭遇スルコトナカリシヲ以テ機關部ニ於テモ格別ノ困難ヲ見ルニ至ラザリシト雖モ若シ全力又ハ四分ノ三速力ヲ要スルガ如キコトアリタランニハ燃料粗惡ノタメ或ハ充分ノ汽力ヲ釀造スルコト能ハザリシヤモ計リガタシ是小官ガ殊ニ省念セル處ニシテ將來ニ向ヒ憂慮ニ堪ヘザル點ナリトス

我石炭ハ以上列記セル缺點ノ外尙頗ル危險ノ要素ヲ具有スルモノニシテ頃日一、二、ノ軍艦ニ起リシ如ク自燃ノ傾向アルコトナリ

石炭調査委員ヨリ其ノ筋ニ提出シタル最後ノ報告ハ我石炭ノ天然ノ儘ニテハ軍用ニ適セザルノ理由ヲ詳述シテ殆ド剩ス處ナシ、其ノ試験ノ方法タルヤ頗ル綿密ニシテ其ノ講究シタル石炭ノ種類モ亦少シトセズ而ルニ其ノ最終報告ハ不幸ニモ石炭ヲ排シテ軍用ニ適セズトナシ而

シテ今回ノ遠征中各艦ニ於テ得タル實驗ハ其ノ報告ト符合シ善良ノ燃料ヲ我現在ノ石炭中ニ得ントスルハ殆ンド空望ニ屬セントスル今日ニ在テハ須ク方針ヲ一變シテ他ニ改良ノ方法ヲ求メザルベカラズ或ハ他日最良ノ炭脈ヲ發見スルコトアルベキモ今ヤ良炭供給ノ確法ヲ定ムルノ必要ニ切迫シ頻ニ焦眉ノ急ヲ告グ此際緩々徒ニ改良ヲ天產ニ望ムガ如キ蓋シ從フベカラズ故ニ現時ニ於テハ石炭調査委員ノ報告セル如ク人工ヲ加ヘテ良質ノ燃料ヲ製出スル外他ニ良策アルヲ見ズ幸ニ我石炭ノ或ル二三種ノ如キハ頗ル煉炭ノ製造ニ適スルヲ以テ今日ノ急務ハ速ニ該煉炭所ヲ起シ人工ニ倚頼シテ我艦艇ノ用ニ供シ得ベキ燃料製出ノ法ヲ講究スルニアリトス若シ之ニ反シ此大問題ヲ等閑ニ付スルガ如キコトアランカ我海軍ノ不利益實ニ莫大ニシテ我艦艇ハ遂ニ其ノ實力ヲ顯表スルノ機會ヲ得ル能ハズシテ止マン是小官ガ我海軍ノタメ憂慮措ク能ハザル處ニシテ敢テ茲ニ卑見ヲ開陳スル所以ナリトス

前陳ノ鄙見何分ノ御詮議相成度上申候也

（終）

明治二十七年十二月在佛爪生海軍大佐ハ同國ノペラム式煉炭ヲ其ノ見本ト共ニ紹介報告シ海軍省ハ先づ研究ノタメ右ノ煉炭六百噸ノ外佛國海軍ノ使用スルアンサン會社煉炭軍艦用三百噸、

水雷艇用三百施合計一千二百施ノ購入ヲ命ジ之等ハ翌二十八年以降漸次本邦ニ到着セシガベラム式ハ實用ノ結果到底軍用ニ適セザルモノトシテ報告セラレタリ
明治二十八年三月佐世保鎮守府司今長官亦煉炭製造所設立ニ關スル朝倉同府機關長ノ意見ヲ進達セリ

石炭調査委員ヲシテ煉炭製造方法ヲ實驗セシム

(明治二十八年)

海軍當局ハ戰役中苦キ實驗ト之等ノ趨勢ニ鑑ミ愈々具體的調査ヲ進ムルコトトナリ明治二十八年七月川口海軍省經理局長ハ上司ノ旨ヲ體シ石炭調査委員會ニ對シ「現時我國土ニ產出スル石炭ヲ以テ艦艇ノ實勢ヲ顯表スルニ足ル煉炭製造」ノ方法ヲ調査スベキ儀ヲ傳達セリ
(註)當時石炭調査委員ハ 委員長 機關大監 吉田貞一

委員 主計大監 八洲亨、機關少監 佐久間國安、機關少監 田邊男外鐵
少技監 辰巳一、大機關士 權田正三郎、大機關士 伊東茂治
大機關士 武田秀雄、技師 下瀬雅允 等ナリ

同年八月吉田委員長ハ上申認許ヲ得テ當時築地月島ニ在リシ日本煉炭合資會社ノ不完全ナル設備ヲ利用シテ煉炭ヲ試製シ之ヲ試驗スルコトトシ、紀州、漆生、天草瓦、天草光炭等ヲ基礎ト

シ唐津、新原、空知、三池等ヲ配合原料トシ國產石油ビツチヲ配シテ十數種ノ煉炭ヲ試造シ横須賀造船部、試驗罐ニテ試驗ノ結果漆生炭九二%、ビツチ八%配合ヲ以テ最上ノ成績ナルヲ確メ同年十二月其詳細ヲ報告シ左記要旨ノ結論ヲナセリ

左記 (石炭調査委員報告ノ結論要旨)

委員ハ我國土產出石炭ヲ以テ充分艦艇ノ實勢ヲ顯表スルニ足ルベキ燃料ヲ得ベシト認定スルモノナリ即チ我漆生炭ノ如キハ最之ニ適セルモノニシテ之ヲ基礎炭トシ單獨又ハ唐津ノ如キノ儀ヲ結論ス

(明治二十八年)
有煙及ビツチノ適量ヲ配剤シ發煙少ク燃燒容易、蒸發力モ亦大ニシテ積載、運搬共便利ナルベキ一種ノ炭料ヲ得ベシト信ズルナリ、天草炭ノ如キモ亦漆生ニ亞テ頗ル有望ニシテ好良ノ基礎炭トナルベキモノアリ
既ニ訓今ノ旨ニ適スル煉炭ヲ製造シ得ベキノ一段ニ至テハ疑フ容レザルヲ以テ今ハ只速ニ所要ノ機械ヲ購入シ完全ナル製造所ヲ起シ以テ多年我海軍ガ憂慮シタル石炭ノ供給ノ問題ヲ確定シ將來ノ大患ヲ除去サレンコト之委員ガ切望措ク能ハザル所ナリ云々尙委員ハ煉炭事業ニ關シ

機械ハ佛國ピエトリツクス會社ノモノヲ可トスルコト

製造所ノ所在ハ門司附近ヲ可トスルコト

煉炭製造所ノ創始ハ今日迄ノ處之レヲ民間ニ期シ難キニ付海軍自ラ創立ヲ要スルコト等ニ關シ詳細所見ヲ具陳スル所アリタリ

(註) 本調査ノ當時ニ於ケル各炭ノ品質ハ左ノ如シ

	固 定 炭 素	揮 發 分	灰 分	炭 素	水 素	酸 素	窒 素	硫 黃	記 事
紀州炭新宮	毛、八	九、七	三、四	毛、七	二、五	一、五	一、〇	三、三	
天草瓦炭	八、九	二、三	四、毛	六、六	三、六	〇、八六	一、九	二、〇三	
同光炭	九、九	二、四	八、四	八、六	三、九	四、一七	一、七	二、〇八	
漆生炭	八、六	三、六	四、〇	八、三	四、七	七、〇七	〇、九	〇、四三	
唐津炭	西、八	三、七	五、四	六、三	五、七	一〇、五〇	一、九	一、一二	
新原炭	五、五	三、九	六、二	七、九	五、四	三、三	一、三	〇、九	
空知炭	吾、三	四、三	六、四	七、九	五、三	三、元	一、元	〇、三〇	

和製ピツチ	三池炭	四、五	四、五	八、三〇	七、三	五、五	一〇、	三、四	農商務省 調査
	五、一元	六、七	七、毛	〇、四					

明治二十九年三月石炭調査委員海軍技師下瀬雅允ハ越後地方ピツチ實況調査報告ヲ提出セリ

越後地方ニ於ケル石油
ビツチニ付
調査
(明治二十九年)

本報告ニ於テ同官ハ越後地方石油生産ノ狀況及ピツチノ性狀等ヲ調査シ現在ノピツチヲ煉炭用
トスルニハ更ニ一段ノ蒸餾ヲ要スベキコト目下ノ處ピツチハ廢物同様ナルモ一朝需用確定セバ
石油業者ハ進ンデ之ガ精製ノ設備ヲナスニ至ルベク而シテ昨今採油ノ増加ニ伴ヒピツチモ年額
四千トンヲ產スルニ至ラン又目下ノピツチ値段ハ長岡地方產ノモノ儀詰メ一トン貳圓前後、新
津地方產ノモノハ其ノ性高溫ニテ軟化シ易カラズシテ取扱上ノ困難比較的少ナリ値段モ不廉ニ
シテ儀詰一トン六圓七拾錢位ナルベシ等ノ趣ヲ報告セリ

海軍當局(川口經理局長)ハ前記石炭調査委員上答ニ基キ煉炭事業創始ニ關シ左ノ通仰裁西郷
海軍大臣ノ決裁ヲ得ルニ至レリ

明治二十九年五月 官房第二〇二號 決裁

採炭製造所
ヲ起シ新原
採炭所ヲ休
止シ漆生採
炭所ヲ置キ
原料炭ヲ採
掘セントス

煉炭製造ノ起業ヲ要スル件

一一四

我國土素ト石炭ニ富ミ邦内各地ニ散在スル炭田ノ數極メテ多シト雖モ其ノ產出スル石炭ニ至リテハ概ニ有煙炭ニシテ到底艦艇ノ實勢ヲ現表スルニ足ラズ是レ廿七八年戰役ノ實驗ニ徵シ確證シ得ル所ナリトス偶々無煙硬質ノモノアルモ天然ノ儘使用シテ一ツモ軍用ニ適スルモノアルヲ見ズ而シテ今ヤ海軍擴張ノ秋ニ際シ好良ノ燃料ヲ得ルハ最大ノ急務ニシテ一日モ忽ニスペキニアラザルナリ

爰ヲ以テ曩ニ石炭調査委員ヲ任命サレ委員ヲシテ我國土產出ノ石炭ヲ以テ煉炭製造ノ方法ヲ調査セシメラレタルニ委員ハ審査ノ末我國ノ產炭ヲ以テ精良ノ軍用煉炭ヲ製造シ得ベキコトヲ確認シ石炭問題ニ關シ將來ノ患ヲ除去スルノ法ハ一ニ只海軍ニ於テ煉炭製造所ヲ起スノ外良策ナキ旨ヲ報告セリ

今其ノ報告書ヲ審議スルニ該事業タルヤ我國ニ於テ未ダ充分ノ經驗アルニアラズト雖モ素ト至難ノ業ト云フニアラズシテ成功ノ目途ニ至テハ委員ノ試驗成績ニ依テ確定セルモノノ如シ而シテ現今海軍豫備炭山產質ノモノノ中漆生炭ノ如キハ無煙質ノモノニシテ煉炭製造ノタメ精良ノ基礎炭トナルベキハ委員ノ報告書ニ明記スル所ナリ

夫レ然リ而シテ漆生ハ礦床大約三十九萬六千有余坪ノ炭田ヨリ成リ其ノ含藏スル見積炭量ハ貳百萬噸ナリトス故ニ假ニ一ヶ年三萬トン内外ヲ採掘スルモ凡ソ七十ヶ年ノ需用ニ應ズルニ足リ海軍消長ノ度ヲ計リ須要ニ準ジテ採掘ノ手段ヲ施サバ基礎炭ノ供給上敢テ支障アルコトナカルベシ

右ニ開陳スル如ク煉炭ハ戰時須要ナルベキモ平時ニハ一般艦艇ノ常用ニ供スルノ要アルヲ見ズ而シテ煉炭ナルモノハ全ク製煉事業ヨリ化成シタル一種ノ人造燃料ナルヲ以テ天然ノ塊炭ニ比シ稍々高價ナルヲ免レズ故ニ之ガ製造所ヲ創設スルモ力メテ使用ヲ節約シ其ノ濫焚ヲ防止セザルベカラズ

而モ亦平時ニ於テ全ク其ノ使用ヲ廢スルトキハ機關兵ヲシテ焚火法ニ熟達スルノ途ヲ妨グルノ患アリテ戰時危急ノ場合ニ際シ却テ有煙炭ニ劣ルノ結果ヲ現ハスノ恐アルベキヲ以テ平時ニ在テハ我海軍諸艦艇ガ消費スル炭量ノ三分ノ一内外ハ煉炭ヲ以テ供給シ其ノ三分ノ二ハ從前ノ如ク有煙柔炭ヲ以テ之ニ充ツル方利益アルベキナリ而シテ煉炭ノ剩余額ハ之ヲ貯藏シ歲期シテ出師ノ準備ヲ完成セシムベシ

次ニ煉炭製造所ヲ設置シ漆生炭ヲ以テ之ガ基礎炭ニ允ツルニハ更ニ採炭所ヲ漆生ニ起スノ必

要ヲ感ズルナリ熟考スルニ良質ノ有煙炭ニシテ海軍ノ常用ニ適スルモノハ我國土之ヲ產スル甚ダ多量ニシテ從來ノ實驗ニ據ルニ筑前若クハ幌内炭ノ如キハ之ヲ民間ヨリ購買シテ毫モ支障アルヲ見ズ殊ニ今日ニ在テハ經驗資力ニ富ミ充分信ヲ措クニ足ルベキ會社若クハ事業家ノ之ヲ營業スルニ至リタルヲ以テ有煙炭ノ供給ニ於テハ必シモ之ヲ新原ニ仰ガザルモ將來ニ憂慮スペキ理由アルコトナシ加之新原坑ハ採炭及運搬ノ法共頗ル困難ニシテ該採炭所ノ事業ハ經濟上收支償ハザルヲ以テ之ヲ廢止シ廢坑ノ諸機械ヲ漆生ニ移ス方遙ニ得策タルベキナリ要スルニ艦艇ノ實勢ヲ表現スペキ燃料供給ノ途ヲ確定スルハ我海軍今日ノ急務ニシテ其ノ乏シキニ應ズルノ策煉炭製造業ヲ開始スルノ外他ニアルコトナシ而シテ我國現今ノ狀態ニテハ之ヲ民業トシテ成功ノ目的少ナク我海軍ノ爲メ決シテ安全ノ法ニアラザルヲ以テ此ノ際海軍ハ自ラ之ガ製造所ヲ起シ年ヲ期シテ出師ノ準備ヲ完成シ一朝事アルニ臨ミ須要ノ軍需品ヲ外國ニ仰グガ如キ危險ナカラシメザルベカラズ

而シテ煉炭製造及ビ之ニ連帶セル事業ニ關セル設計ノ大要左ノ如シ

一、煉炭製造所建設

一ヶ所

此ノ起業費（煉炭製造機械購入費ヲ含ム）凡ソ三十四萬五千圓

石炭調査委員ノ提出セル豫算書ニ據レバ一日ノ製出高百五十噸ノ製造所ヲ起ス計畫ナルモ是稍過大ナルヲ以テ一日九十噸ニ減縮スルヲ得策トス此ノ程度ハ最我海軍ニ適スルモノニシテ煉炭ヲ以テ現在ノ艦艇消耗炭量ノ三分ノ一ヲ供給シ充分ノ剩余アルノミナラズ出師準備ノ貯藏炭年ヲ追テ漸次增加スルニ從ヒ艦艇ノ常用スペキ煉炭ノ量モ海軍擴張ニ伴フテ增加スペキヲ以テ常用ト剩余兩者ノ比例好ク海軍ノ需要ニ應ジテ増減シ出師準備完成ノ後ト雖モ製出額ノ需用ヲ超過スルガ如キ患ナカルベキナリ、製造所ノ位置ハ門司地方最モ適當ナルベシ而モ土地ノ狀況水源ノ有無其ノ他調査ヲ要スル件アルヲ以テ實査ノ上ニテ本業ニ便益ナル處ヲ選ビ海軍所管煉炭製造所ノ建設ヲ要ス

二、漆生採炭所建設

一ヶ所

漆生ニ採炭所ヲ建設スルトセバ新原坑業用ノ器械ハ概不移用セラルルヲ以テ曩ニ新原炭坑ヲ起業セシ程ノ費用ハ要セザルベシ而シテ採炭ハ亂掘竭盡ヲ最モ恐ルモノナレバ到底民業ニ委スルヲ得ズ結局官業トシテ海軍ニ於テ礦業ヲナス方可ナルベシ多量ノ石炭ヲ運搬スルハ至難ノ傾向アルモ聞說豊前小倉ヨリ筑前大隈（漆生近傍）マデ鐵道

ヲ布設スルノ企アリト云ヒ又九州炭礦鐵道會社ニ於テ筑前飯塚ヨリ大隈迄ノ線路ヲ延長スルノ企アリト云フ果シテ然ラバ之等計畫ノ内何レガ成立スルモノトセバ運輸上好都合ヲ得ルニ至ラン

三、新原採炭所ノ處分

煉炭製造所及漆生採炭所ヲ建設スルトセバ該坑ハ無用ニ歸スルモノノ如シ然レドモ現今ノ採坑ハ新原礦區第一乃至第三區内ノ一部分ニ過ギズ又假ヒ有煙炭ナルモ本邦炭中稍優等ニ位スルヲ以テ煉炭製造ノ基礎確定スルノ後ニ於テ存廢ヲ議スルモノトシ先づ夫レ迄ハ現今ノ採掘事業ヲ廢シ機械ハ漆生ニ移シ依然海軍豫備炭山トシテ所管シ置ク方可ナルベシ

以上列記ノ如クナルニ依リ來三十年度ニ於テ煉炭製造所及漆生採炭所ヲ建設シ新原採炭所ヲ處分スル方最必要ト認メ候

本件御裁可ノ上ハ夫々豫算調製ニ着手スペクト存候條茲ニ仰御高裁候也

附 本件御決定ノ曉ハ左ノ事項速ニ決行アリタシ

一、門司地方ニ於テ煉炭製造所建設地ノ撰定

二、漆生採炭所建設位置及同所ヨリ採炭製造所迄石炭運搬ノ方法及礦業上必要ナル事

項

右調査ノ爲筑前地方へ相當官吏派遣ノコト

煉炭製造所
設立地ヲ物
色ス
(明治三十九年)
上延定期付
再度提案
(明治三十一年五月)

斯クテ武田大機關士ハ煉炭製造所建設地調査ノタメ門司、大里、小倉及其ノ附近、若松及其ノ附近、芦屋及遠賀川驛附近、福岡博多附近、折尾驛及其ノ附近、中間驛及其ノ附近、臼井

及其ノ附近ヲ實地ニ踏査シ明治二十九年八月、同官ハ中間驛及其ノ附近ノ水田所在地ヲ以テ

最適地タルコトヲ報告セリ

而シテ煉炭製造所設立ニ關スル豫算ヲ明治三十年度ニ計上スルノ件ハ閣議ニ於テ延期トセラレタル爲更ニ海軍省軍務局ハ翌明治三十年五月ニ至リ再度煉炭起業ノ件(煉炭製造所設立豫算參拾九萬圓余三十一年度ニ着手ノ件ナリ)並ニ煉炭製造所建設委員ヲ置クノ件ヲ提案シ夫々官房第一九一〇號及官房第一九六六號ヲ以テ海軍大臣ノ決裁ヲ得タリ

又右煉炭製造所設立ノ計畫ニ伴ヒ之ガ原料タルベキ漆生炭調査ノタメ同炭山ノ試錐ニ着手セルコト別ニ述ブルガ如シ

(第一編漆生炭山記事参照)

漆生炭山試
錐着手
(明治三十一年)

一方前述スル如ク民間ニ於テモ早クヨリ煉炭事業ニ着目スルモノアリ殊ニ明治二十五年頃ヨリ以來海軍ニ出願陳情ヲナスモノ多ク石炭調査委員ハ屢々之ガ試験調査ニ從事セリ今其主ナルモノヲ錄スルニ

明治二十五年十一月乃至翌二十六年五月ノ頃千葉縣土族毛利元國ノ製造ニ係ル煉炭（天草無煙炭及高島炭配合）ヲ水雷艇ニテ試焚シガ結果良好ナラズ

明治二十七年十一月東京本所區吉川泰二郎、森岡昌純、濱田篤三郎等煉炭製造ノ試験ニ關シ出願シ海軍ハ之ヲ諒シ試験用材料トシテ新原中等炭、幌内炭、各六噸、天草瓦炭同光炭漆生炭各十二噸、新原上等炭、唐津炭、田川炭各六噸宛下附ノ件ヲ關係鎮守府ニ訓令セリ是ニ於テ吉川等ハ和田維四郎及工學博士渡邊渡ノ兩氏ニ研究ヲ委嘱シ渡邊氏ハ自己ノ任處タル佐渡御料礦山ノ設備ヲ利用シ漆生、天草光炭、同瓦炭、及紀州無煙炭ヲ基礎炭トシ高嶋、三池、高雄、及新原（三重）ヲ調合炭トシ十六種ノ煉炭ヲ試製シ分析、及熱量測定ノ結果本邦炭ヲ以テ佛國煉炭ニ劣ラザル軍用煉炭ヲ得ベキコト並ニコールタピツチノ代リニ越後產石油ヒツチヲ試験セリ

吉川等ハ明治二十八年九月右研究ノ結果ヲ海軍ニ報告シ且ツ煉炭製造ニ關スル海軍ノ將來方

針ヲ伺ヒタリ海軍ハ右試験成績ヲ以テ有益ノ資料ト認メ其ノ盡力ヲ謝スルト共ニ海軍ノ方針ニ關シテハ之ヲ示シ難キ旨ヲ回答セリ

又大阪市、大上伊三郎ハ明治二十八年十一月以來兩三回ニ亘リ其ノ製造煉炭ノ試験ヲ願出テ石炭調査委員ハ或ハ陸上罐ニ於テ或ハ水雷艇等ニ於テ試験ヲナセシガ明治三十一年一月同委員ノ報告ニ於テ大上煉炭ハ漸次品質改善セラレタルモ未ダ艦船ノ實勢ヲ現表スルニ足ルベキ軍用煉炭タルニ適セズ而シテ本邦有煙炭ニ比スレバ稍良好ノモノタルコトヲ認メラルニ至レリ

（註）右大上ヨリ明治三十年九月海軍大臣へ提出ノ卑見書中過去ニ於ケル本邦煉炭企業ニ關シ述べテ曰ク

（前略）

「…………之迄煉炭業ヲ企畫シタルモノ幾十名アリト雖モ其ノ功ヲ奏シタルモノナク二三ノ例ヲ舉レバ

明治十七年頃若松港ニ於テ櫻井某外國ヨリ煉炭製造機械ヲ購入シ着手セルモ研究中死シ其ノ子之ヲ繼ギシモ成功セズ其ノ後外國人ヲ聘シ從事セシメタルモ不結果ニシテ其

ノ機械ハ明治二十六年迄廢物同様ニ放置シアリタリ其ノ當時不肖伊三郎ヲシテ從事セシメンコトヲ帆足義方ナルモノヨリ申込ムコト三回此ノ機械ノ圖面ヲ見ルニ到底完全製造ノ見込ナキヲ以テ之ニ應ゼザリキ此ノ機械ハ目今月島煉炭會社ノモノ之ナリ

明治二十八年長崎市福田某、天草魚貫炭坑主峰讚吉等ト計リ製造シタリ

明治二十九年一月ヨリ同八月迄東松浦郡假屋邊ニ於テ三井物産會社ノ技師某及澤田祐信等ノ考案ニテ製造セルモノ、東京ニ於テハ明治二十一年頃須崎ニ於テ榎本某ノ計畫アリ、其ノ後築地炭坑會社内ニハ牧野技師ノ考案ニ係ルモノアリ、之等一ツトシテ效ヲ奏シタルモノ無之不肖伊三郎モ亦其ノ内ノ一人ニ候……（下略）』

又明治三十年七月東京月島日本煉炭合資會社專務取締役渡邊榮太郎ヨリ其ノ製造セル煉炭ノ試驗ヲ願出テ且ツ同社ハ先般來佛國ベ一トリツクス煉炭製造法ニ倣ヒ加熱混和兩法共汽力ヲ用ヒ成績良好ナルコト及每一ヶ月製造高七百噸乃至一千噸ナル旨ヲ具陳スル處アリシガ石炭調査委員ハ試驗ノ結果、右煉炭ノ品質到底軍用ニ適セザルモノトセリ

第二章 煉炭ノ採用

天草炭業（日本煉炭）株式會社

民間ニ於ケル煉炭企業ノ狀況概々前述ノ如ク見ルベキモノナカリシ中ニ獨リ天草炭業株式會社ハ着實ナル發達ヲ遂ゲ後年永ク軍用燃料ニ貢獻スルニ至レリ

天草無煙炭ニ關シテハ海軍ハ既ニ明治十四年頃ヨリ留意調査セルコトアリ後煉炭問題ヲ論ゼラルルニ至リテハ本炭ヲ佛國ニ送リ煉炭ニ試製セシメラレタルコトアリテ軍用炭問題ト關聯シ常ニ注目セラレタル處ナリキ明治二十七八年戰役後同戰役ノ實驗ニ徵シ愈々煉炭ノ必要ヲ認メラルルニ及ビ更ニ石炭調査委員ノ調査ニ依リ同地方產出無煙炭ノ煉炭原料ニ適スペキコトヲ認メラレタリ

偶帆足義方ナルモノ曩ニ煉炭企業ニ關與シ天草無煙炭ヲモ調査セルコトアリ茲ニ男爵中島錫胤小野金六、眞中忠直、吉田千足等ト協力シ海軍用煉炭供給ノ目的ヲ以テ天草炭ヲ原料トスル煉炭ノ製造ニ關シ調査ノ末遂ニ明治三十年四月天草炭業株式會社（資本金百萬圓）ヲ設立シ同年七月天草郡崎津ニ煉炭工場ヲ設置スルニ至レリ